

IV 各科（課）のあゆみ

1 診療科

(1) 内科

内科としての記載は全体としての人事と教育体制を俯瞰する記載とし、詳細は各専門領域の記事にゆだねるものとします。

[人事]

2022年3月に長年当院に勤めてきた肝臓内科部長・緩和ケア内科の石黒浩史が定年退職、5月末で循環器内科医長の小西宏明、呼吸器内科副医長の長谷川華子が他院に異動となり、2022年4月から9月まで（6か月間）安田格が腎臓内科副医長として赴任しました。泌尿器科医長の栗田華代が緩和ケア内科医長となり、有期常勤医であった秋本香南が緩和ケア内科副医長となりました。

当院基幹プログラムの地域医療・総合内科コースの専攻医（後期研修医）としては第2期生の中垣達、佐藤真央の2名が当院プログラムを終了して有期常勤医として勤務しながら2022年5月の第2回内科専門医資格認定試験（日本専門医機構）に合格し、野口遼は引き続き6年目の研修を行いました。また同年4月から第3期生の桑野柚太郎が当プログラム2年目の連携施設である横浜市民病院とこうかん病院での各6か月研修を終えて復帰、第5期生の倉増佑樹が1年目として新規入職しました。また、当院で初期研修を行った田倉裕介が当院基幹プログラムのacademicコースの1年次に進みました。

慶応義塾大学病院基幹プログラムの小野里隆太は呼吸器内科を中心に、川井雅敏、米澤江里菜はリウマチ内科を中心に内科サブスペシャリティのローテーション研修をそれぞれ1年間、中島文は消化器内科を中心に内科サブスペシャリティのローテーション研修を1年間、北里大学病院基幹プログラムの阪本陽介が当院でリウマチ内科6か月と川崎市立川崎病院で総合内科6か月間の計1年間研修しました。東京女子医科大学病院高血圧内科の小宅健太郎が糖尿病内科を中心に1年間研修しましたが2023年度も引き続き6か月間研修を行う予定です。川崎市立川崎病院基幹プログラム船曳隼大、林浩一の2名が6か月間当院で消化器内科を中心に研修を行いました。連携施設からの6か月間ローテーションとしてけいゆう病院の岩井佑太（変則的に2022年1月～6月）がリウマチ内科と消化器内科、山本佳穂がリウマチ内科と消化器内科、日本鋼管病院の吉邨沙栄佳が腎臓内科・リウマチ内科・緩和ケア内科、渡部和気が消化器内科を中心に研修を行いました。国立病院機構東京医療センターの井田諒が腎臓内科を中心に研修を行い、山下博美は引き続き9月末まで研修を行いました。

なお、緩和ケア内科単独の研修については該当項目を参照ください。

初期臨床研修では、2022年4月に落合志野、谷岡友則、西本寛、山内智喜、山田園子の5名と慶應義塾大学病院のたすき掛けの後藤亜紀子、近藤稜の2名が採用され、2021年4月当院プログラムで採用された池 瞳、王野添鋭、廣瀬怜、藤塚帆乃香、藤原修が2年次研修を行いました。

[教育研修]

古くから伝統のある呼吸器内科、腎臓内科、リウマチ内科に加え内科各専門分野の充実が図られてきております。

血液内科は専門医2名体制で充実した診療体制を構築してきたところですが、更なる発展のため診療圏に患者数が多く、かつ専門入院設備を充実させた川崎病院に拠点を移し、当院では外来診療と病

棟患者コンサルトを行う体制となっています。血液疾患患者の経験が少ない専攻医には2年目の連携病院研修で川崎病院へのローテーションという選択肢もある旨伝えていきます。

内科全員および病棟単位での定期的なカンファレンスや、抄読会、CPC、外部からの医師を招いてのカンファレンスも開催しています。

神経疾患に関しては、聖マリアンナ医科大学病院から秋山先生、萩原先生、臼杵先生に診療指導をいただいております。

当科では2018年度からスタートにずれ込んだ新専門医制度においても基幹型病院としてのプログラムを整備するとともに慶応義塾大学、東京女子医科大学あるいは川崎市立川崎病院、横浜市民病院、けいゆう病院、済生会中央病院、日本鋼管病院、東京医療センターなど魅力的な病院と相互に連携することで優秀な専攻医の確保が可能となりました。

厚生労働省が推進しつつある初期臨床研修医制度の下での研修病院の認定を、当院は1999年度末に得ましたが、研修病院としては他の一般的な内容に加えて次のような特色を持っています。

① 結核病棟があり、他の病院ではなかなか見られない肺結核の症例を豊富に経験できることは、当院における研修の特色の一つであります。

新型コロナウイルス感染症蔓延により神奈川県の実務で結核病棟患者の転院を行い、新型コロナウイルス感染症中等症患者の受け入れる神奈川モデル重点医療機関として地域医療の中核を担っていましたが、現状に鑑み7月から結核病棟への結核患者の受入を再開しました。これに伴い新型コロナウイルス感染症患者の多いときは救急後方病棟の全部を使用して一般救急患者は一般病棟で受入れ、少ない時は救急後方病棟の一部を使って受入れ、救急患者の受入も同病棟で並行して行いました。

② 当院はホスピス病棟を持っています。ここでは、避けられない死を前にして患者と家族を一体として診療の対象としています。ホスピスでの研修は counseling mind を以って、診療する良心的な医師を育てる好機であり、各科に共通するターミナルケアの真髄を学ぶことができます。専門医になるとままたれがちな重要なポイントを、医師として初期の段階で経験しておくという、極めて意義深い内容を含んでいます。

③ 往診を含む在宅医療を容易に研修することができます。近年慢性疾患の予後が改善し、一線病院では在宅医療や病診連携の需要がますます高まりつつあります。その現場を臨床研修初期の段階で実際に経験しておくことは、研修医が将来どのような専門医になろうとも極めて有用です。この在宅医療・病診連携を取り扱う部門が院内に併設されており、ターミナルケアと併行して研修することができます。

④ 在宅持続携行式腹膜透析(CAPD)を研修できます。高齢者が増加した結果、在宅で腹膜透析をおこなう方が通院での血液透析よりもQOLにおいて優れていることが理解されてきました。当院では在宅CAPDに力を入れており、その導入、維持管理、合併症治療などの研修を幅広くおこなうことができます。

⑤ エイズについても専門医が在籍しており多くの症例を勉強する機会があります。

⑥ 川崎市立川崎病院をローテートし、3次救急、周産期医療、新生児医療、精神科救急など多様な研修を組み合わせる行うことができます。

(文責 内科系副院長 鈴木 貴博)

内科常勤職員 (2022年4月1日)

氏名	職名	主たる専門分野
伊藤 大輔	院長	消化器内科

鈴木 貴博	副院長	リウマチ内科
好本 達司	循環器内科部長	循環器内科
西尾 和三	診療部長・内科部長・呼吸器内科部長	呼吸器内科
高松 正視	消化器内科部長	消化器内科
金澤 寧彦	糖尿病内科部長・研修管理委員長	糖尿病・内分泌・代謝
中島 由紀子	感染症内科部長	感染症内科
滝本 千恵	腎臓内科部長	腎臓内科
原田 裕子	循環器内科担当部長・血液内科部長兼務	循環器内科
栗原 夕子	内科担当部長	リウマチ内科
奥 佳代	内科担当部長・健康管理室室長	リウマチ内科
佐藤 恭子	在宅緩和ケアセンター所長	緩和ケア
久保田 敬乃	在宅緩和ケアセンター副所長・担当部長	緩和ケア
中野 泰	呼吸器内科担当部長	呼吸器内科
西 智弘	腫瘍内科医長	化学療法、緩和ケア
丹保 公成	糖尿病内科医長	糖尿病内科
亀山 直史	呼吸器内科医長	呼吸器内科
荒井 亮輔	呼吸器内科副医長	呼吸器内科
西成田 詔子	呼吸器内科副医長	呼吸器内科
高窪 毅	糖尿病内科副医長	糖尿病内科
前田 麻実	腎臓内科副医長	腎臓内科
一條 真梨子	腎臓内科医師	腎臓内科
阿南 隆介	内科副医長	リウマチ内科

常勤医（会計年度任用）および内科専攻医（2022年4月1日）

氏名		主たる専門分野
雑賀 優鳥	糖尿病内科医師	糖尿病
中垣 達	呼吸器内科専攻医	呼吸器
野口 遼	内科専攻医	腎臓
佐藤 真央	糖尿病内科医師	糖尿病
森 沙希子	内科専攻医（出向中）	糖尿病
桑野 柚太郎	内科専攻医	腎臓
倉増 佑樹	内科専攻医	消化器
米澤 江里菜	内科専攻医	リウマチ・膠原病
吉邨 沙栄佳	内科専攻医	腎臓
岩井 佑太	内科専攻医（2022年1月～6月）	消化器
山本 佳穂	内科専攻医	消化器
山下 博美	内科専攻医	内科
中島 文	内科専攻医	消化器

阪本 陽介	内科専攻医	リウマチ・膠原病
川井 雅敏	内科専攻医	リウマチ・膠原病
小宅 健太郎	内科専攻医	糖尿病
小野里 隆太	内科専攻医	呼吸器
井田 諒	内科専攻医	腎臓
田倉 裕介	内科専攻医	academic コース

(2) 呼吸器内科

2022年度は4月に中垣医師が専攻医研修を修了し、スタッフに加わりました。また専攻医として1年間在籍された小山医師が慶應義塾大学病院呼吸器内科に異動となり、かわって小野里医師が専攻医として赴任しました。また5月末には長谷川医師が国立病院機構東京医療センターへ異動となり、西尾、中野、亀山、荒井、西成田、中垣の常勤医師6名と専攻医1名の体制で診療を行いました。2023年2月から西成田医師が産休・育休を取得されています。

2022年度の疾患別入院患者数では、肺がんが最も多く、次いでCOVID-19、肺炎、間質性肺炎が上位となりました。肺がんの外科的治療につきましては川崎市立川崎病院呼吸器外科の先生方にご協力頂きました。外来化学療法にも積極的に取り組んでおり、引き続き各科と協力しながら肺がん診療を行っていきたいと考えております。また当院では、COVID-19 流行の影響により休止していた結核病棟への結核患者の受け入れを7月に再開いたしました。近年増加傾向にある肺非結核性抗酸菌症の診断・治療についても専門性の高い診療を目指しており多くの症例を診させて頂きました。気管支鏡検査は水曜、金曜午後に行っており、2022年度は83件とCOVID-19 流行の影響を受け流行前より減少しました。一方、放射線診断科の協力を得て施行して頂いているCTガイド下肺生検は増加傾向にあります。外来は月曜日から金曜日まで毎日2診体制を維持し、専門外来としては引き続き在宅酸素外来を月曜日、木曜日午後に、月曜日午後には禁煙外来を開設しています。

学会活動も活発におこなっており、本年度も日本呼吸器学会、日本内科学会を中心に学会発表を行うとともに、多施設共同研究にも積極的に取り組んでいます。今後も若手医師の教育にも取り組みつつ、地域医療に貢献できるよう努めてまいりたいと考えております。

(文責 呼吸器内科部長 西尾 和三)

(3) 循環器内科

当院循環器科は循環器科部長 好本、担当部長 原田、心臓血管外科部長 森が循環器科診療を担当しております。2022年6月に小西医長が退職の運びとなりました。また心臓カテーテル検査、経皮的冠動脈形成術に横浜市立市民病院の根岸医師、杏林大学医学部附属病院循環器科の小山医師に援助を仰いでおります。外来は毎日循環器科専門外来を開き、また他に月2回ペースメーカー外来・不整脈外来・睡眠時無呼吸症候群外来を開き、循環器疾患を有する患者の診察を行っております。

循環器科が担当する非侵襲的検査は12誘導心電図・ホルター心電図・心エコー・冠動脈CT・心筋シンチであります。2022年度の12誘導心電図の件数は8703件で、循環器科で全て診断し必要があればコメントを加え他科の診療の一助になっております。心エコーは検査技師の協力ののもと、2022年度は1998件に施行しました。また冠動脈CTを91件、薬剤負荷心筋シンチを37件、TI+BMIPPを108件、ピロリン酸シンチを2件に施行し心疾患の非侵襲的評価に威力を発揮しております。

循環器科が担当する侵襲的検査・治療は心臓カテーテル検査、経皮的冠動脈形成術(PCI)、ペースメーカー植え込み術であります。2022年度は心臓カテーテル検査を87症例に、経皮的冠動脈形成術を33例に、恒久式ペースメーカー植え込み術を22症例に、ペースメーカージェネレーター交換を8症例に施行しました。

循環器科が取り扱っている主な疾患は狭心症・心筋梗塞・心不全・弁膜症・心筋症・不整脈・肺塞栓症・高血圧等であり、上記疾患に罹患し、精査加療を要する患者は適宜入院していただいた上で薬物療法にて治療し、また必要があれば上記の侵襲的治療を施行しております。

(文責 循環器科部長 好本 達司)

(4) 血液疾患センター（血液内科）

1. 診療科概要

2012年に常勤医1名で新設された当科は、受診される患者様の増加に対応して、2017年より常勤医2名の診療体制となっております。さらに当院常勤医により川崎病院で専門外来が開設され、2020年に川崎病院において無菌室設置工事が行われ、2021年4月より無菌室の稼働が開始されました。これに伴い、井田病院血液内科常勤医は川崎病院へ移籍となり、入院診療業務は主に川崎病院で行う体制となりました。2022年度は非常勤医師による週3回の外来診療が主体ですが、外来化学療法や輸血など積極的に行い、入院診療も件数は少ないですが行っております。

2. 人事

2021年4月より定平部長は川崎病院へ移籍し血液内科部長に就任されましたが、毎週金曜日は午前・午後にわたり当院にて積極的な外来診療（化学療法を含む）を行っております。ほかに毎週月曜日には山崎医師、毎週水曜日には外山医師が昨年度に引き続き外来診療を担当されています。

3. 診療実績

2022年度の外来患者数は1992名（2021年度：2330名、2020年度：3661名、2019年度：4440名）、入院患者数は8名（他に内科入院として数名）（2021年度：5名、2020年度：254名、2019年度：269名）でした。いったん内科または循環器内科入院として入院していただき、川崎病院へ転院するというケースもありました。

(文責 血液内科部長 原田 裕子)

(5) 腫瘍内科

2015年度に化学療法センターが開設された際、腫瘍内科も当院に新設され診療を継続しております。患者さんの生活や生き方を十分にお尋ねし、大切にしたいものを護るための手段のひとつとして、抗がん剤治療の提案・提供をしております。

川崎市の皆様にご安心頂けるよう、世界的標準治療を当院でも提供できるよう研鑽に努めています。また、緩和ケア科と一体となった診療を行っており、がんによる症状緩和や精神的サポートなどにも対応していきます。

また、腫瘍内科は化学療法センターの専従として、その管理および急患発生時の初期対応に当たることを業務としております。化学療法センターの環境向上にも努めており、以前であればベッドも1.5回転ほどが限界だったものを、2回転以上可能となるようにしており、より多くの患者さんを受け入れられるように今後も検討を重ねてまいります。

当科での診療対象となる疾患としましては、消化管および肝臓・胆道・膵臓に発生した悪性腫瘍ですが、消化管間葉系腫瘍(GIST)、消化管原発神経内分泌がん(Neuroendocrine cancer:NEC)、原発不明がんなどの抗がん剤診療も行っております。また他科との連携の上で、頭頸部癌や婦人科癌の治療にも携わってきました。

世界的に「早期からの緩和ケア」が進められる中で、当院においても地域における緩和ケアの充実のみならず、治療に対する支持療法や意思決定支援、また通院の負担が大きい場合などの抗がん剤治療継続まで幅広く対応するために、腫瘍内科緩和ケア初診(早期からの緩和ケア外来)の枠を設置し、運営してきました。対象としましては、川崎市内在住の StageIV(再発や転移がある)がんの患者さんで、他院において抗がん剤治療継続中に、当院に緩和ケアでの通院もご希望される方になります。

腫瘍内科と緩和ケアが統合された診療体系は世界的に推進すべきと考えられている課題でもあり、当院の成功事例は国内のみならず海外からも注目されてきました。今後も、国内外のエビデンスをふまえて、近隣との医療連携に努め、市民へのよりよい診療の提供ができるように取り組んでいく所存です。

2022 年診療実績

・化学療法実施延べ件数(化学療法センター)

混注件数:2872件(2021年度2502件)

延べ人数:2131名(2021年度1958人)

(文責 腫瘍内科部長 西 智弘)

(6) 糖尿病内科

2022年度の糖尿病内科の外来および入院業務は、昨年度に引き続き主として金澤、丹保、高窪、雑賀、佐藤真央の5名で行いました。また糖尿病内科を志望する内科専攻医として小宅医師、田倉医師、中島医師も一般内科診療の傍ら糖尿病内科の診療に従事いたしました。また診療と並行して雑賀医師が、日本専門医機構認定内分泌代謝・糖尿病領域専門医および日本糖尿病学会認定糖尿病専門医を取得いたしました。従来より御協力いただいている非常勤業務の医師を含めると6名の糖尿病専門医でおおよそ1200名余の外来患者の診療にあたり、入院業務にあたっている医師でおおよそ年間300名あまりの入院患者の診療を行いました。

当科の研修診療内容は、昨年度までと同様、教育入院だけでなく、糖尿病を基礎疾患に持つ患者の併存疾患や糖尿病合併症の加療を目的とした入院患者が多く、その診療を継続しております。多岐にわたる疾患を抱える高齢糖尿病患者の治療の中で、併診という形で糖尿病診療のサポートも行っております。上記入院患者においては、糖尿病の診療だけでなく、専門の垣根を超えた総合的診療を求められる患者が多く含まれております。

新規の治療薬、治療機器が次々世に出る昨今、今後も当科の診療をupdateし診療の質を引き続き維持してゆきたいと思っております。少数例ですが内分泌疾患も外来、入院で加療いたしました。学会発表も日本糖尿病学会、内科学会地方会でそれぞれ一演題ずつ発表を行いました。学会活動を今後も引き続き積極的に取り組みたいと思っております。

療養指導の面においては、コロナウイルス感染症の影響を受け2020年度は患者向け講演会の開催は行いませんでしたが、今後はWEB媒体を活用した形での患者向け講座の開催などを考えております。外来、入院の中でCDE(糖尿病療養指導士)を中心に、患者層に応じた指導を継続しております。多岐にわたるきめ細

かい指導が求められる糖尿病診療の中で、個々の負担を軽減する意味においても、今後療養指導に関わるスタッフをさらに増やし充実できればと考えております。

(文責 糖尿病内科部長 金澤 寧彦)

(7) 腎臓内科

2022年度は、安田格医師が2022年4月に入職され9月に退職されるまで腎臓内科常勤医4名、下半期は常勤医3名、2023年2月より前田麻実医師が休職されてからは、2名で診療業務を行うとともに、初期研修医・後期専攻医の指導にあたりました。後期専攻医としては野口遼医師(D6)、桑野柚太郎医師(D5)、井田諒医師(D4)が一年間、腎臓内科の研修を行いました。

腎臓内科としては、高血圧(本態性・二次性)、各種腎臓病、慢性腎臓病の保存期から末期腎不全に至るまで各ステージに応じた診療を行い、急性血液浄化療法も含め、当科専門領域全般に渡って診療を行いました。外来は月曜から金曜まで毎日の腎臓専門外来に加え、CKD外来、腹膜透析外来を行う傍ら、コメディカル協力のもと栄養指導、腎代替療法選択指導も行いました。入院診療に関しては主な内訳として、急性腎障害、慢性腎臓病、高血圧症の精査加療等を行い、腎生検9例、内シャント作成20例、透析導入17例を行いました。近隣クリニックからの透析患者様の入院受け入れも積極的に行うとともに、新型コロナウイルス感染症にまつわる透析患者様16名に対し、加療いたしました。

学術的には日本内科学会、日本腎臓学会、日本透析医学会、日本高血圧学会の認定教育施設であり、関連学会や研究会へ参加しながら、医療のスキルアップに努めています。

今後も確かな診療を提供し、地域医療に少しでも貢献していければと存じます。

(文責 腎臓内科部長 滝本 千恵)

(8) 脳神経内科

2022年度も神経内科は2021年度と同じ非常勤医師による対応でした。

月曜日午後は白杵乃理子医師、水曜日午後は秋山久尚医師、金曜日午前は荻原悠太医師の担当で外来診療および入院患者のコンサルテーションに対応してもらいました。

(文責 脳神経内科部長 鈴木 貴博)

(9) 感染症内科

当院はエイズ診療拠点病院として、HIV感染者の診療にあたっています。2022年度は当院通院中の患者が神奈川県で最初のMpoxの診断に至りました(全国8例目)が、流行に至ることはありませんでした。いきなりエイズで紹介される患者数は減少しており、早期治療開始の重要性が感染者の中で浸透してきたのではないかと考えています。コロナ下では自国へ帰れなくなったために受診される外国人症例が多数ありましたが、今年度の新規外国籍患者症例はありませんでした。

また当院は国際渡航医学会(International Society of Travel Medicine)のGlobal Travel Clinicとして登録されており、渡航後の感染症診療だけでなく渡航前の健康相談を行っています。2022年度も新型コロナウイルス流行の影響が続き渡航相談業務は縮小していました。

新型コロナウイルス感染症に関して、当院は人工呼吸器を使わない中等症患者までの受け入れを行う神奈川県の重点医療機関となっており、外来診療、入院加療ともに多数の患者の受け入れをしてき

ました。しかしオミクロン株が主流になってからは重篤となる入院患者は少なく、社会的入院が増加した印象です。

結核診療に関しては、昨年7月から結核病棟再開となり呼吸器内科とともに外来・入院診療を継続してきました。また針刺し事故対応業務（院内外）、抗菌薬適正使用指導等の感染対策室業務も担っております。

教育

当院は日本感染症学会の研修施設になっています。

医療従事者に対し、院内感染対策室主催の講習会を利用し（詳細は院内感染対策室の項目参照）感染症教育を行っています。また、学会発表やAST業務を通して研修医や専攻医の感染症診療の指導も積極的に行っています。

（文責 感染症内科部長 中島 由紀子）

（10） 消化器センター 肝臓内科・消化器内科

① 診療科概要

2022年度も内科の中の消化器内科・肝臓内科部門の一翼として肝疾患を中心に消化器疾患につき診療に当たりました。

消化管病変として胃・十二指腸潰瘍（消化管出血を含む）、急性胃腸炎、大腸憩室炎、大腸憩室出血、S状結腸軸捻転、腸閉塞や潰瘍性大腸炎、クローン病などの炎症性腸疾患（IBD）など多岐に渡る良性疾患の診断と治療。食道癌、胃癌、大腸癌などの悪性腫瘍の診断。

肝疾患として、ウイルス性慢性肝炎（B型、C型）、NAFLD（非アルコール性脂肪性肝疾患）、自己免疫肝疾患（AIH, PBC, PSC など）、肝硬変、肝細胞癌（HCC）、胆管細胞癌（CCC）の診断と治療。

胆嚢・膵疾患として胆石・総胆管結石/胆嚢炎・胆管炎、胆道癌、急性膵炎、膵臓癌、膵管内乳頭粘液腺腫（IPMN）などの諸病変の診療を行いました。

② 人事異動報告

常勤専属スタッフとして、高松正視（消化器内科部長）が有期常勤医（後期専攻医）を指導しながら共に病棟診療に当たり、更に伊藤大輔（院長）、非常勤医師（市川理子、有泉健、井上健太郎）、有期常勤医（中島文、岩井佑太、倉増佑樹）を含めた7名体制（交代制を含む）で外来診療を行いました。

また今年度は消化器内科の後期専攻医として、

当院のプログラムで2022年4月から2023年3月まで倉増佑樹医師が着任し診療に従事しました。

更に以下 慶応大学病院、川崎市立川崎病院、けいゆう病院、日本鋼管病院から各病院基幹プログラムのローテーション派遣により着任し当科診療に従事しました。

2022年4月から2023年3月まで、中島文医師（慶応大学病院）、

2022年4月から6月まで、岩井佑太医師（けいゆう病院）

2022年7月から9月まで、山本佳穂医師（けいゆう病院）

2022年7月から12月まで、船曳隼大医師（川崎病院）

2022年10月から3月まで、林浩一医師（川崎病院）、渡部和気医師（日本鋼管病院）

非常勤では市川理子医師、川崎市立川崎病院から交代制で有泉健医師、井上健太郎医師が消化器内科専門外来を担当しました。

一方 昨年に引き続いて、市川理子医師、下山友医師、井出野奈緒美医師、松下玲子医師が消化器内視鏡を担当しました。

③ 診療実績

(1) 今年度の肝疾患関連の処置などは、肝生検 7例、肝血管造影 / 肝動脈塞栓術 18例、CART（難治性腹水濃縮還流再静注療法）は 3例でした。

今年度は肝細胞癌に対するRFA（ラジオ波焼灼術）及びPEIT（経皮経肝エタノール注入療法）はありませんでした。新規の薬物療法（アテゾリズマブ/ベバスタマブ療法）導入 1例、分子標的治療薬導入（レンバチニブ）は 2例でした。

(2) また放射線科と連携し胆膵疾患や胃静脈瘤に対して、以下IVR治療を行いました。

胆膵悪性腫瘍などに伴う胆道閉塞症に対する、IVR/PTBD 6例

大腸癌、転移性肝臓癌に対する手術前のPTPE（経皮経肝門脈塞栓術）1例

胃食道静脈瘤に対するPTO（経皮経肝胃静脈瘤塞栓術）1例

胆道系感染症症例でのPTGBAは今年度も高頻度でした。

(3) 消化器内視鏡は消化器センターの内科部門として外科と協力して、上部・下部内視鏡を担当しました。

食道静脈瘤内視鏡治療（EVL（内視鏡的静脈瘤結紮術）：6例 延べ12回

硬化療法（para-EIS：5例、intra-EIS：1例）

大腸ポリープEMRとポリペクトミーは外来、入院併せて当科として219例に対して処置を行いました。

本年度も昨年に引き続き新型コロナウイルス感染拡大などにより診療実績が十分とは言えませんでした。来年度巻き返しに期待したいところです。

④ その他（課題点などを含む）

本年度も積極的に学会活動に携わり、日本内科学会の学会発表を行いました。

今後も若手医師の教育体制の充実を目指したいと考えています。

2022年3月で長年当科診療を牽引してきた石黒浩医師（元 肝臓内科部長）が定年退職しました。

上記の通り本年度は高松が有期常勤医を指導し連携を図りながら診療に従事しました。来年度は横浜市立大学からの常勤医1名と有期常勤医1名、慶応大学からの常勤医1名の派遣が見込まれますが、更なる常勤スタッフの補充が急務であると考えます。また外来や病棟業務を安定、充実させるため後期専攻医を安定して獲得する体制作りや環境整備も必要と考えます。

（文責 消化器内科部長 高松 正視）

(11) 消化器センター 外科・消化器外科

① 診療科概要

一般消化器外科として、がんを中心とした悪性消化器疾患、胆のう結石症・大腸ポリープなどの良性消化器疾患、イレウス・急性腹膜炎などの急性腹症、腹部・鼠径部のヘルニア疾患、末梢血管疾患、肛門疾患、等に対する外科手術治療・内視鏡手術治療を主に臨床診療に当たっています。

② 人事異動（敬称略）

大城雄基が、2022年4月に外科専攻研修医として1年間の研修を修了し、慶応義塾大学呼吸器外科学教室に帰室しました。

亀山友恵が、2023年4月から外科専攻研修医として1年間の研修を目的に慶応義塾大学外科学教室より着任しました。

足立陽子（外科副医長）が2022年4月に国立病院機構東京医療センターに異動となりました。

大森泰（内視鏡センター長）、掛札敏裕（副院長）、有澤淑人（消化器外科部長）、夏錦言（呼吸器外科部長）、櫻川忠之（外科部長）藤村知賢（外科担当部長）、は異動ありませんでした。

大山隆史には非常勤手術指導医として、毎週金曜日を中心に指導を継続していただきました。

和多田晋には第2・4火曜日に血管外科外来・手術を内容として川崎病院からの支援を受けました。

③ 症例実績（2022年度）

臓器	疾患	術式	件数
咽頭・喉頭	咽頭、喉頭がん	内視鏡下咽頭喉頭粘膜下層剥離術(ELPS)	20
食道	食道癌	胸・腹腔鏡補助下食道癌切除術	3
胃十二指腸	上部消化管穿孔	大網充填術	3
		胃癌	幽門側胃切除
		腹腔鏡下幽門側胃切除	6
		胃全摘術	5
		腹腔鏡下胃全摘・噴門側胃切除術	2
		胃 SMT(GIST)	LECS 手術
	十二指腸癌	LECS 手術	1
小腸・大腸	GIST/悪性リンパ腫	切除術	2
	虫垂炎	腹腔鏡下虫垂切除術	20
		開腹虫垂切除術	4
	イレウス	根治術（腸管切除含む）	6
	腹膜炎・急性腹症	根治術（腸管切除含む）	10
	肛門良性疾患	根治術	5
	腸管ストマ関連	ストマ造設術 / 閉鎖術	10/2

	結腸癌	腹腔鏡下結腸癌手術	41
		開腹結腸癌手術	11
	直腸癌	腹腔鏡下前方切除術	7
		開腹前方切除術	2
		腹腔鏡下マイルス手術	2
		開腹マイルス手術	1
		ハルトマン手術	6
		経肛門切除	0
早期大腸がん	EMR/ESD	23/15	
肝胆膵	胆石/胆嚢ポリープ	腹腔鏡下胆のう摘出術	41
		開腹胆のう摘出術	5
	肝臓がん	肝切除術	6
	胆嚢がん	拡大胆嚢摘出術	1
	膵がん/胆管がん	膵頭十二指腸切除術	2
		膵体尾部切除術	3
末梢血管等	CPD	CPD カテ挿入/抜去	1/1
	ASO	血管内治療	14
	下肢静脈瘤	硬化療法（ストリッピング追加含む）	10
	シャント	シャント造設術	3
	CV ポート	CV ポート造設術	37
ヘルニア疾患	腹壁・腹腔内ヘルニア	腹腔鏡下ヘルニア根治術	0
		直達式ヘルニア根治術	8
	鼠径部ヘルニア	腹腔鏡下ヘルニア根治術	22
		直達式ヘルニア根治術	43

④ 反省と展望・課題

慢性継続している外科の減員状態のため、オンコール体制をはじめとする、基本的業務の維持継続が第一目標となり、ロボット手術医療などの発展的展開を望める状況にはありませんでした。

手術症例数の傾向では、胃癌手術症例はほぼ昨年と横ばいでしたが、大腸がん手術症例は増加しました。

働き方改革に向けた、病棟完全チーム制・非単独主治医体制などに関しては、今後の課題です。

（文責 消化器外科部長 有澤 淑人）

(12) プレストセンター（乳腺外科）

【理念・方針】

乳癌はいまだに増加の一途を辿り、今では日本人女性の9人に1人が乳癌に罹患します。

井田病院は2012年5月より乳腺外科外来を独立させ、より専門的かつ最新の医療を提供できるよう環境を整備致しました。そして、2018年4月からプレストセンターに名称を変更し、慶應義塾

大学病院とも連携し常に先進の治療を提供していきます。

診断においては川崎市内には設置の少ないステレオガイド下マンモトームやトモシンセシス(乳房断層マンモグラフィ検査)を有し、治療においてもアイソトープを併用したセンチネルリンパ節生検やディッシュエキスパンダーを用いた乳房再建術にも対応しております。若年性乳癌の増加に伴い、妊孕性温存や遺伝性乳癌にも対応できるよう近隣施設とも連携しております。

当院では、平均して3泊4日で乳癌手術を行っております。これは全国的にも短い入院期間で、お忙しい世代のニーズに応えられるよう配慮しております。短い入院期間にも関わらず、退院後に合併症による再入院は10年間で0.1%未満という成績を自負しております。

また、がん診療連携拠点病院である当院としましては、地域クリニックとの『がん診療連携』にも重点を置いております。近隣に乳腺専門施設が少ない立地を生かし、より地域に根付いた乳腺診療を行っていきたくと考えております。

【年間症例数】(2020年4月 - 2023年3月)

乳癌症例数		2020年	2021年	2022年
手術	総件数	126件	74件	91件
	乳房部分切除術	99件	58件	63件
	乳房全摘術	26件	15件	26件
	乳房再建術	4件	6件	1件
治療	放射線治療	60件	32件	61件
	化学療法	1,107件/695人	879件/558人	1,059件/658人
外来	外来受診総数	4,476人	4,777人	5,352人
	紹介患者数	213人	284人	338人

【対象疾患】

良性疾患	症状	乳房痛、乳汁分泌、炎症 など
	可能性のある病名	乳腺症、乳腺炎、乳頭異常分泌症 など
	検査法	マンモグラフィ、超音波、MRI、細胞診、組織診 など
腫瘍性病変	症状	しこりを自覚、健診で指摘、皮膚のひきつれ など
	可能性のある病名	乳腺症、良性腫瘍、葉状腫瘍、乳癌 など
	検査法	マンモグラフィ、超音波、MRI、細胞診、組織診 など
石灰化病変	症状	マンモグラフィにて石灰化を指摘
	可能性のある病名	乳腺症、良性腫瘍、葉状腫瘍、早期乳癌 など
	検査法	マンモグラフィ、超音波、MRI、細胞診、組織診 など
乳頭部異常	症状	乳頭部のただれ、出血 など
	可能性のある病名	皮膚疾患、バジェット病、乳癌 など
	検査法	マンモグラフィ、超音波、MRI、細胞診、組織診 など

【主な検査・機器など】

遺伝子検査	遺伝性乳癌卵巣癌症候群(HBOC)を調べるための BRCA 検査や、抗癌剤の適応を調べるコンパニオン診断が可能です。
3D マンモグラフィ (トモシンセシス)	通常のマンモグラフィ検査に加え、乳房の断層撮影が可能な最新器機を導入しております。
乳房造影ダイナミック MRI 検査	マンモグラフィや超音波では診断が困難な場合、造影剤を用いた MRI 検査にて乳腺の詳細な情報を得ることができます。 (喘息の方は造影剤が使用できません)
エコーガイド下吸引針生検	超音波にて異常を認めた場合、超音波ガイド下にマンモトームという機器を使って針生検をします。 通常の針生検と比べ、より確実に組織を採取できます。
ステレオガイド下吸引針生検	マンモグラフィにて異常石灰化を指摘された場合、マンモグラフィで確認しながらマンモトームという機器を使って針生検をします。

【当院で可能な手術】

乳腺腫瘍切除術	局所麻酔下にて、良性腫瘍を日帰り手術で摘出します。
乳腺腺葉区域切除術	乳頭異常分泌症において、乳汁分泌を来す異常乳管を同定し、その乳管を含む腺葉のみ切除する術式です。
センチネルリンパ節生検	乳癌の手術において、腋の下のリンパ節に転移があるかどうかを調べる検査です。当院では色素法と RI 法の併用法で行いますので、より確実な結果を得ることができます。
乳房温存手術 (温存術)	乳癌の手術において、腫瘍の大きさや位置によっては乳腺を部分的に切除することで、乳頭および乳房の形状を温存することができます。(多少は乳房が変形することがあります)
胸筋温存乳房切除術 (全摘術)	乳癌の手術において、乳頭・乳輪および乳腺を全て切除する術式です。
乳頭温存皮下乳腺全摘術	乳癌の手術において、乳頭・乳輪は温存し乳腺のみを全て切除する術式です。
組織拡張器による乳房形成術	乳房切除術後に、エキスパンダーといわれる組織拡張器を同時挿入します。後日、シリコンバッグや自家組織との入れ替え術を行います。

【医師紹介】

氏名	認定資格	所属学会
嶋田 恭輔	日本外科学会専門医 日本乳癌学会専門医 検診マンモグラフィ読影認定医 検診乳房超音波読影認定医 乳房再建用エキスパンダー-実施施設責任医	日本乳癌学会 日本外科学会 日本癌治療学会 日本人類遺伝学会 日本乳房ワコプラステックサージャリ-学会 日本臨床外科学会

佐藤 知美	日本外科学会専門医 日本乳癌学会認定医 検診マンモグラフィ読影認定医	日本乳癌学会 日本外科学会 日本癌治療学会 日本臨床外科学会
久保内 光一 (非常勤)	日本外科学会専門医 日本乳癌学会専門医・指導医 日本乳癌検診学会評議員 検診マンモグラフィ読影認定医 検診乳房超音波読影認定医 日本医師会認定産業医	日本乳癌学会 日本外科学会 日本乳癌検診学会 日本臨床外科学会
山脇 幸子 (非常勤)	日本外科学会専門医 検診マンモグラフィ読影認定医	日本乳癌学会 日本外科学会 日本癌治療学会 日本臨床外科学会

(文責 乳腺外科部長 嶋田 恭輔)

(13) 呼吸器外科

呼吸器外科は、専門常勤医が不在であり、川崎病院所属の医師により週2回（火曜日午前、木曜日午前）の外来診療を行なっています。2022年度の外来は、昨年度に引き続き、火曜日は奥井、木曜日は澤藤が担当しています。

外来で可能な対応は井田病院で行っていますが、手術など治療に入院を要する場合には川崎病院に紹介しています。今後も、川崎病院と連携して診療を行っていきたいと考えています。

(文責 呼吸器外科部長 夏 錦言)

(14) 整形外科

2022年度は、整形外科常勤医5人の体制で診療を行ってまいりました。2022年度の人事異動は、3月末に今本医師が異動し、4月から田邊医師が赴任しました。

年間の手術件数は348件で、昨年度に比べて39件の増加でした。内訳は表のとおりでした。

1日平均患者数は、外来が37.0人、入院は24.5人でした。

非常勤医師による足の外科専門外来（畔柳）、脊椎専門外来（小柳・上田）は続いており、診療分野を広げた体制を維持しています。

2023年度も今まで同様、地域医療に貢献してまいりたいと考えております。

手術(2022年)

・骨折・脱臼手術		・脊椎手術	0
大腿骨近位部骨折 骨接合術	60	・肩関節鏡手術（腱板断裂・滑膜切除など）	0
大腿骨近位部骨折 人工骨頭置換	55	・膝関節鏡手術（靭帯再建・半月板切除など）	9
四肢骨折・脱臼骨折	57	・骨軟部腫瘍	87

・人工関節置換術		・手の外科領域（神経剥離、腱縫合、人工指関節など）	14
股関節	10	・足の外科領域（外反母趾、腱縫合など）	5
膝関節	16	・下肢切断	5
肩関節	0	・その他	30
肘関節	0	計 348	

（文責 整形外科部長 水谷 憲生）

（15）脳神経外科

2017年度に川崎市立川崎病院に脳神経外科の人員を統合することとなり、井田病院に常勤医は不在となったため、2022年度は入院および手術件数は0件となっています。

外来は週2回、月曜日は三島、水曜日は小野塚（共に川崎病院より派遣）が担当しました。適宜脳神経外科疾患のフォローアップや紹介、新規の依頼、救急等対応しております。また、手術などの高度な対応は川崎市立川崎病院と緊密な連携を持って対応しております。

（文責 リハビリテーション科・脳神経外科担当部長 三島 牧）

（16）精神科

① 診療科概要

我々は、総合病院における病床をもたない精神科ですので、主な業務は身体科各科に入院した患者さんへの精神科医療（リエゾン医療）の提供となります。またそうした医療の一環として、当院の特徴でもある緩和ケアの活動にも積極的に関わっています。外来診療も同様で、身体科に通院中の患者さんへの精神科医療の提供が柱となりますが、それに加えて柴田の専門領域の児童思春期精神医学は、川崎地域に医療資源が乏しいことから積極的に患者さんを引き受けています。

② 人事異動

火曜日午前外来の担当医が慶應義塾大学からの派遣医師赤尾先生から小中先生に変更になりました。

③ これからの課題

2022年度は常勤医2名体制であったため、これまで以上にリエゾン医療に力を傾注した結果、新規依頼数及び既存患者数が大幅に増大しました。しかし、2023年度以降は再び常勤医1名の体制に戻るため、増大した需要への対応の工夫が必要になることが予想されます。

（文責 精神科部長 柴田 滋文）

（17）リウマチ膠原病・痛風センター

【人事】2012年4月よりリウマチ膠原病・痛風センターとなりました。2021年度の診療はセンター長の鈴木貴博、栗原夕子、奥佳代、阿南隆二、水谷憲生、竹内克仁、山本隆、田邊優で行いました。

【外来診療】リウマチ膠原病・痛風センターとして、12番ブロックでの診療を行いました。リウマチ科としては全ての午前中にリウマチ専門医を配置し、同様に午前中に診療を行っている整形外科医と連携してリウマチ性疾患の診療を行いました。

【診療実績】関節リウマチについては、MTX 内服を基本治療としつつ、必要な患者には生物学的製剤、JAK 阻害薬を積極的に導入しました。外来で、生物学的製剤導入時に自己注射の指導を行いました。また化学療法室で、生物学的製剤点滴静脈注射患者の化学療法外来を行いました。その他、関節リウマチの内臓重症合併症、膠原病、血管炎症候群の精査・入院加療、リウマチ性多発筋痛症、痛風・高尿酸血症などを外来で診療しています。

【学会活動】日本内科学会関東地方会、日本リウマチ学会総会学術総会・関東地方会、日本アレルギー学会関東地方会などに積極的に参加し、発表や最近の知識取得に努めました。

【当科関連の学会による施設認定】日本リウマチ学会認定教育施設、日本アレルギー学会認定教育施設、日本感染症学会認定教育施設

【今後の展望】 センターでの診療の質をより高め、患者満足度を高めるため、整形外科、理学療法士、看護師、その他コメディカルとの連携を充実させていきたいと考えています。また、リウマチ専門医を目指す若い医師の教育にも力を入れていきたいと考えています。

(文責 内科 栗原 夕子)

(18) 皮膚科

人事異動

常勤医として安西秀美・鈴木千尋・土屋茉里絵医師(敬称略)、非常勤医として亀谷葉子医師(敬称略)にもご協力頂き診療を行っております。

診療科概要

日本皮膚科学会認定専門医研修施設となっております。地域拠点病院の診療科として、幅広く皮膚科全般に対応し、外来・入院診療を行っております。手術にも積極的に対応しています。

外来診療

皮膚科一般外来は平日午前中予約制ですが、11 時までの外来受付時間にお越し頂ければ、紹介状や予約をお持ちでなく当日来院された方も受診可能です。緊急の時間外診療もできる限り対応しております。

午後は主として予約制で下記を行っております：

手術(局麻・全麻)、“できもの”(脂漏性角化症など)“しみ”(老人性色素斑など)に対する炭酸ガス・Q スイッチルビーレーザー、高周波ラジオ波メス

皮膚生検、パッチテストやスクラッチ/プリックテスト等の各種アレルギー検査

爪診療；巻き爪・陥入爪治療(ワイヤー・巻き爪マイスター・クリッピング・ガター、フェノール法)、厚硬爪グラインダー・爪切り等の爪処置

光線療法(エキシマライト、ナローバンド UVB、PUVA)、脱毛症治療の SADBE、など。

アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、尋常性乾癬、化膿性汗腺炎などに対する生物学的製剤も積極的に導入しています。入院対応も行っており、フットケア及び褥瘡・スキンケア・スキントラブルに対するチ

ーム医療回診を継続、他科依頼にも随時対応しております。緩和ケア科と協力の元、ロゼックスゲル®、モーズ氏ペーストをはじめとした腫瘍皮膚浸潤への処置・ケアも行っております。

* 爪診療・レーザーの一部は自費となります。

手術件数

皮膚良性腫瘍・悪性腫瘍の切除術や拡大切除、植皮・皮弁による再建について積極的に当科にて対応しています。顔面など部位特殊性のあるものや規模の大きな皮弁の再建などについては当院形成外科とも連携しながら行っています。

年間手術件数： 270 件、生検件数： 126 件

今後の展望

的確な診断とわかりやすい説明を心がけており、必要に応じて他科や関連病院・慶應をはじめとする大学との連携をとっております。皮膚科分野における生物学的製剤や外用の新規薬剤が続々と登場しており、これらも積極的に導入しながら、今後とも病診連携、病病連携をはかり、地域の医療に少しでも貢献できましたら幸いです。

(文責 皮膚科部長 安西 秀美)

(19) 泌尿器科・泌尿器内視鏡科

2022 年度の人事では小杉道男・小宮敦医師の部長 2 人は変わらず、井上雅弘・岩本源太医師の異動に伴い、荘所一典医師、宮井敏孝医師が赴任しました。緊急手術が必要な救急疾患なども含めた様々な泌尿器科疾患に対応できるよう、引き続き 4 人体制でチーム医療を行ってまいります。

内視鏡や腹腔鏡手術による低侵襲治療の実践と、女性泌尿器科を含む幅広い分野の泌尿器科疾患の治療に取り組んでおります。膀胱浸潤癌に対するロボット支援膀胱全摘術、女性泌尿器の骨盤臓器脱に対するロボット支援仙骨膣固定術も導入から順調に軌道に乗っております。ロボット支援前立腺全摘術については、癌のコントロールとともに機能温存も積極的に取り組んでおり、男性機能温存のみならず術直後から尿失禁がみられない質の高い手術を目指しております。

2022 年度手術件数

名称	件数	名称	件数
ロボット支援前立腺全摘	47	TUL	56
TUR-BT	78	TUR-P	15
腹腔鏡下根治的腎摘術	7	高位精巣摘除	4
腎部分切除	9	尿失禁手術	2
腹腔鏡下尿管全摘	11	前立腺針生検	126
ロボット支援膀胱全摘	5	ESWL	25
ロボット支援仙骨膣固定術	8	腹腔鏡下仙骨膣固定術	1

(文責 泌尿器科部長 小杉 道男)

(20) 婦人科

当科は 2016 年度以降常勤 1 名態勢での診療が継続しています。診察の要は内視鏡特に子宮鏡検査及び子宮鏡手術(TCR)であり、子宮筋腫や子宮内膜ポリープ手術、子宮奇形の形成手術、子宮腔癒着の解消などを子宮鏡で行っており、過多月経・月経困難症などの月経異常、腫瘍の摘除から不妊症領域まで広く対応しています。もう一つの柱は子宮がんの予防と早期発見・早期治療であり、子宮頸がんワクチン、子宮がん検診、初期子宮頸がん治療（外来レーザー蒸散、入院円錐切除術）まで、予防から治療に至るまでシームレスかつ総合的に実施しています。子宮頸がんは若年者に増加している現状を鑑み、妊孕性維持のためにレーザー蒸散術による早期介入は有用です。レーザー蒸散術は外来手術で実施しており、患者様の負担を軽減すべく 2 時間程度の在院期間で完遂できるよう対応しています。

2022 年度手術件数

手術		件数	手術		件数
膣式手術	円錐切除術	11	子宮鏡手術	TCR-P	12
	レーザー蒸散術	9		TCR-M	6
	その他	4		子宮鏡計	18
	膣式計	24	合計	42	

基本的に若年者の月経異常に対するホルモン療法から妊孕性温存あるいは向上のための治療、更年期の対応から老年期に至るまでの女性の生涯を通したヘルスケアを重視した診療を行っています。地域医療に貢献すべく、引き続き努力してまいります。

(文責 婦人科部長 岩田 壮吉)

(21) 眼科

診療科概要

2022 年度は高野洋之部長、鴨狩ひとみ医長（2022 年 9 月まで）、鈴木なつめ副医長、關口真理奈医師（2022 年 9 月より）師の 3 名体制で診療を行いました。視能訓練士については 2 名の体制で診療を行っております。

外来診療

午前是一般外来を行っており、午後は視野検査、術前検査、蛍光眼底造影などの特殊検査や網膜レーザー治療、YAG レーザー後囊切開術などを行っております。

また、当院薬剤部の協力もあり、耐性菌、真菌、アカントアメーバの治療についても対応できます。

手術

手術は白内障、抗 VEGF 薬の硝子体注射、前眼部の小手術（翼状片、結膜弛緩など）を中心に行っております。薬剤を用いた帯状角膜変性症の治療的切除も行っており、羊膜移植術についても施行可能となりました。

角膜移植手術については一部の症例については当院で施行しており、国内ドナーによる待機手術、

海外ドナーによる予定手術も可能です。網膜、硝子体手術については常勤医に網膜専門医が不在なため、必要に応じて適切な専門施設に紹介しています。

業績

2022年度外来患者数は 5988名（2021年 5633名）、手術は 257件（白内障、硝子体注射、翼状片、など一前年 199件）でした。外来、手術ともに前年度よりも大幅に増やすことができました。

今後の展望

2022年度は COVID-19 の影響も限定的となり、平時のレベルの診療にほぼ戻すことができました。2023年度は更なる発展を目指し精進していきます。

（文責 眼科部長 高野 洋之）

（22）耳鼻咽喉科

1. 診療科概要

上気道感染症、中耳炎、難聴、めまい、アレルギー性鼻炎といった一般的な疾患から、音声障害、嚥下障害、難聴耳鳴といった聴覚器・咽喉頭の機能障害や頭頸部腫瘍まで幅広く対象疾患として取り扱っています。治療にあたっては QOL の維持・向上を目指した治療選択を心掛けています。常勤医師 1 名体制で外来診療および手術を含めた入院対応に当たっており、専門的な治療を必要とする場合は専門外来での診療を行っています。

2. 人事異動

副医長・海保医師が 2022 年 3 月に退職し、以後、常勤医師は医長・此枝のみの診療体制になりました。

3. 診療内容

午前中は 1 診あるいは非常勤医師との 2 診で再診・初診外来を行いました。前年までと同様、水曜日（手術日）は原則休診と致しました。

一部の疾患に対しては専門外来を設け、特に専門性の高い診療を実施しております。

専門外来としては、喉頭音声外来（担当 此枝）／月曜午後、耳鳴難聴外来（担当 小川非常勤医師）／金曜午前に外来を設置し、診療を行いました。

4. 外来・入院患者件数と手術件数

外来・入院患者件数

1日の患者数	人
外来患者数 / 1日	15人
入院患者数 / 1日	1人

手術症例内訳

術式	件数	術式	件数
経鼻内視鏡下副鼻腔手術	14	耳下腺浅葉切除術	1
顕微鏡下喉頭微細手術	10	頸部腫瘍摘出術	1
鼻中隔矯正術	8	耳瘻管摘出術	1
口蓋扁桃摘出術	7	経口唾石摘出術	1
頸部リンパ節生検術	2	下口唇嚢胞摘出術	1
鼓室形成術	2	上顎腫瘍生検	1
耳下腺深葉切除術	1		

(文責 耳鼻咽喉科医長 此枝 生恵)

(23) 麻酔科

川崎市立川崎病院麻酔科と慶應義塾大学医学部麻酔学教室の派遣医師と共に麻酔科管理枠 2 列または 3 列で対応し、2022 年度の総手術件数 1829 件（前年度比 106%）のうち麻酔科管理件数は 1224 件（前年度比 104%）でした。

各科麻酔科管理件数は、外科 298 件、乳腺外科 81 件、整形外科 296 件、泌尿器科 422 件、婦人科 31 件、耳鼻咽喉科 34 件、歯科口腔外科 47 件、皮膚科 14 件等となっています。

新型コロナ蔓延の影響はなくなりつつあり、2019 年度の 90%まで回復しました。

(文責 麻酔科部長 中塚 逸央)

(24) 歯科口腔外科

当科ではおもに口腔外科疾患といわれる、歯だけではなく口腔、顎、顔面の一部の治療を行っております。午前中は月～金曜日、連日 3 名体制で外来診療を、午後は、親しらずの抜歯などの外来手術、入院下全身麻酔手術、病棟での口腔ケア、顎関節・口腔顔面痛専門外来などを行っております。一般歯科治療（歯牙齲蝕、義歯、歯周病など）は、原則、当院他科入院中の方への応急的な対応と、重篤な全身疾患により全身管理が必要な方に対してのみ実施しております。診療体制は、2022 年 4 月においては、歯科医師 3 名（村岡、木村、横田）、歯科衛生士 3 名で行っております。

また、当院他科および地域歯科医師会と連携して、消化器系がんや化学療法、放射線療法、緩和ケアに伴う口腔ケアを行い、合併症などを最小限に抑制するための周術期口腔機能管理（口腔ケア）を実施しております。今後も、当院医科と地域医療部にご協力をいただき、口腔ケアにおける地域歯科医師会との地域医療連携もさらに強めていきたいと考えております。

昨年度の延患者数は 7,929 人でした。外来診療では、口腔粘膜疾患や顎関節症などの治療を中心に、外来日帰り手術として、下顎埋伏智歯・埋伏抜歯術、歯根嚢胞摘出術・歯根端切除術、顎骨嚢胞摘出術などを行っています。当科への入院患者数は年間 76 人（延患者数 371 人）で、全身麻酔手術目的が 50 名、その他、歯が原因の蜂窩織炎や全身管理が必要な抜歯術などでした。手術室での全身麻酔手術の内訳は、顎骨嚢胞摘出術が最も多く、完全埋伏智歯抜歯術や口腔癌手術などでした。また手術室での局所麻酔手術は、インプラント手術が主でした。

今後も、地域歯科医師会/医師会との地域医療連携を充実させ、院内他科、看護部、地域医療部、そ